

「黄金・夢舞台 その1」

「時は金なり」は、私には「時は黄金の光なり」と聞こえてくる。時間は光の存在とともにあるが、それゆえ人や生物は七色ならぬ黄金夢舞台の光のなかで生きている。

ゴッホはプロヴァンスの光に触発されて時代の絵画手法の規範にとらわれず、画面に黄金の色いっぱい「ひまわり」を描いた。ゴッホの終の棲家だ。

砂漠に突出する巨大な四角錐状の建造物はピラミッドだ。太陽の下に光り輝くピラミッドは黄金の塊、その中には光の道があり、ここは季節の光の角度に合わせて作られているという。

ピラミッドは実はファラオが居を設け黄金の品々に囲まれ、さらに黄金の光を導くことにより終の棲家を堪能していたのだと私は考えている。これはファラオの黄金夢舞台。

日本では黄金の舞台というと秀吉の金の茶室を思い浮かべる。



写真・MOA 美術館 HP (黄金の茶室を復元)より

この茶室は侘び寂びを解しない秀吉がつくった下品な建物だと非難されて有名な話である。秀吉と利休との確執が生み出したこの茶室だが、茶道に対しての権力者のなんと強烈な意思の表現・圧力であったことだろう。英雄、色・黄金を好むというが、時の権力者ならではの建物である。彼が五十代はじめのころの黄金夢舞台だ。

秀吉の辞世の句、「露と落ち 露と消えゆる 我が身かな 難波のことは 夢のまた夢」。

西洋の石造教会は天から光が差し込み、ステンドグラスから七色の光が降りそそぎ、黄金の空間が出現し室内が煌めく。

日本の木造建築、仏閣は大きな屋根に覆われているが、その下の薄暗闇の中に鎮座する金色の仏像は密かな光を放っている。そこから浄土に導く。東西共に宗教建築はこれまた究極の「終の棲家」。



写真・ウィキペディアより

足利義満が別荘として造営した京都鹿苑寺の金閣寺は三層宝形造りの楼閣、柱、壁、勾欄などに金箔を張りこんでいる。松の木に囲まれた明るい庭園に建つこの建物は、絢爛豪華な眩い金の光を放っている。これもまた権力者が浄土を願う終の棲家を意識している。

金の色には純粋な金色、銅との合金での赤金色、銀を混ぜると青金色などになる。



写真・関山中尊寺(金色堂)HPより

梅雨の季節に飛び交う蛍の光は青白い光を放つというが私は緑金色の光に見える。

藤原三代の霊廟・平泉の中尊寺にある金色堂は、いまは鞘堂に入っている。かつては杉木立の中で潤んだ金色の光を放っていたと思う。多分この光は蛍の緑金色に近い色ではないかと思うと、是非ともそのもとの姿を見たいものだ。ここでもまた浄土を連想させる建物は、時代の流転の中で人の信仰心に沁み入る場となっている。

この黄金の夢舞台は権力者が求めた究極の終の棲家である。彼らは信仰の証としてまた懺悔の場として、そして権勢と富を誇る場としてこれらを建立した。

一般民衆にとっては現実の住処はさておき、この夢の黄金舞台はその空間を通して黄泉の国、浄土へと、また復活を予感させる過去、現在、未来を想起させ、導いてくれる。

「黄金・夢舞台 その2」

終の棲家というと、とかく人生終焉のようなネガティブなイメージを抱き勝ちだ。昔は人生50年と短命だったので、終の住処で受身的・晴耕雨読の生活を人々は待ち望んだ暮らし方だった。

現在日本人の健康年齢は車椅子などの世話にならな

いで居る状態で平均80歳～86歳という。そこには豊富な時間があるが、この時代こそ貴重な時間を活かした生活・黄金夢舞台を実現したい。

そんな黄金夢舞台に思いを馳せながら、実際の終の棲家はボロでも心は錦の思いで古い家のままでいくのもよし、ここは一丁気張って終の生活にふさわしい住いを作ることもよし、キラキラ光る黄金宝石の住いもまたこれよし。

それではとその終の棲家づくりをと意気込んで考えると、とかく実質的に安全安心、バリアフリー対策にこだわる家を考えがちだが、もっと生活にメリハリが持てる場と広がりのある住いの造り方が望ましい。勿論家の構造・性能についてはキチンと造っておく必要があるのは言うまでもない。

杉並の方は建て替えに際して旧宅の材料を再利用しながらアトリエ付き住いを3100万黄金で。



栃木の方は2600万黄金をかけ、濡れ落ち葉と言われない離れ式円形書齋付き住宅を。



世田谷の方は2300万黄金で膨大な書籍を収納する書庫付き住宅を造る、さいたまの方は2400万黄金で気密断熱を行いソーラーシステムとし木の家を、そして中野の方は茶室付き住宅を増改築し「終の棲家」を、などがある。

あなたはどんな住いを黄金夢舞台にしますか。私はというと「錦系」で依頼された住宅でイメージを膨らませ、設計をしていくことが黄金夢舞台。 end